

【書評】

中山京子・東優也・太田満・森茂岳雄編著『「人種」「民族」を
どう教えるか—創られた概念の解体をめざして』

(明石書店, 2020年刊, 292頁) 2,600円+税

阪上弘彬
(千葉大学)

「人種」や「民族」にかかわる学習内容は、小学校から高校の地理・歴史・公民のいずれの学習にもみられ、社会のグローバル化に伴い共生社会が目指される中で、今後ますます重要な学習内容となるだろう。本書は「グローバル化し、地域社会や学校が多文化し、人の多様性を受容すべき今こそ、教育に関わる者がこの考え方を改善する努力をする責任がある」(序章, pp.12-13)という強い言葉で、「人種」「民族」という言葉に向き合う必要性が主張され、「人種」「民族」を扱う従来の学習やそれを取り巻く環境に対して一石を投じる。また本書は社会科教育において国際理解教育に関わる研究者と小・中・高校の教員、文化人類学の研究者の合計7名によって執筆された労作であり、章構成は以下に示すとおりである。

序章 今、「人種」「民族」を問う意義

第I部 教育において「人種」「民族」はどう認識され、論じられてきたか

第1章 「人種」とヒトの多様性—学校でのまなびのために

第2章 「人種」「民族」とは何か

第3章 「人種」に関する認識

第4章 社会系教科の教科書記述に見る「人種」「民族」

第II部 日本と外国で「人種」「民族」について授業でどう教えられてきたか

第5章 日本における「人種」「民族」を取り上げた授業構想

第6章 アメリカの初等・中等学校の人類学教育における「人種」言説と実践—1930年代～1960年代を中心に

第7章 外国では「人種」「民族」をどのように教えているか

7.1 アメリカ・オーストラリアにおいては「人種」「民族」はどのように教えられているか

7.2 台湾では先住民族についてどのように教えられているか—民族学習としての族群関係教育課程の可能性

第8章 「人種」と「先住民族」に関する学習

8.1 「人種」概念と「先住民族」

8.2 「人種」と日本の先住民族

8.3 「人種」とアメリカ先住民族

8.4 「人種」とパシフィック・アイランダー

第III部 学校で「人種」「民族」をどう教えるか

第9章 「人種」をテーマにした授業づくりのために

第10章 「人種」を問い直す授業実践

10.1 低学年児童と肌の色による区分や「肌色」表記を考える—グローバルな見方・考え方の育成を目指して

10.2 「人」へのまなざしを考える小学校実践—「人種化」された人々や「人種」概念について考える

10.3 「人種」という言葉を問い直す—だれもが自分らしく生きられる社会をつくるために

第11章 小学校における授業構想

11.1 小学校中学年の子どもと主人公を色で強調することを考える—絵本やモノから「いいのかな」を探す

11.2 高学年児童に「人種は創られた概念である」ことを教える—「人種」はない?

第12章 中学校における授業構想

12.1 民族問題やレイシズムを現代日本の事例から考える—沖縄の人々の意識と米軍基地

12.2 分離するアメリカ、混合するアメリカ—多民族社会の形成と「人種」

第13章 高等学校における授業構想

13.1 ナチス時代の「ドイツ人/ユダヤ人」から「人種」を考える

13.2 歴史総合の授業で不可視化された先住民

族の過去を考える

あとがき

4章から構成される第I部では、「人種」「民族」に関する言説や人々の意識が調査され、その概要が紹介される。第1章では文化人類学者の竹沢泰子氏により、「生徒たちに最低限これだけは学んでもらいたいと筆者が考える三つのポイント」として、①西欧中心的な考え方の呪縛からの解放、②身体的特徴の「ちがひ」をヒトの多様性の観点からによる正しい理解、③日本における人種主義を見つめなおすこと、が提示される。第2章では、「人種」「民族」等の用語が整理される。第3章では大学生・教師・子どもの「人種」に対する認識の調査結果が報告される。第4章は明治から現在に至る小学校教科書での「人種」「民族」の記述の変遷、小中高教科書での記述の構図と問題点が明らかにされる。

第II部では、「人種」「民族」を扱った学習指導や実践の実態が報告される。具体的には第5章では日本、第6章ではアメリカ、第7章ではアメリカとオーストラリア、台湾が取り上げられる。先駆的な提案や実践事例、プロジェクト、カリキュラム、教師用手引書を紹介・分析しながら、各国・地域における取組の実態が明らかにされる。第8章は4つの論考から構成され、主に日本、アメリカ、太平洋諸島における「先住民族」が取り上げられる。

第III部では小学校から高校における実践例が収録される。第9章では、「授業を組み立てるための知識と、環境を整えて実際に授業を行う勇気の双方が必要になる」と主張され、日本の授業で「人種」を扱う難しさやおすすめを展開方法（身近なものの教材化）が紹介される。第10章では3つの授業の概要が示される。第11章から第13章にかけては学校種ごとに実践例がその背景・詳細とともに2つずつ紹介される。

あとがきでは、本書の出版に至る背景や著者の願いが編者の中山京子氏によって語られる。加えて本書には6つのコラムが掲載され、読者の「人種」「民族」や関連する問題への理解を深めてくれる。

以上、簡単に本書の概要を整理したが、評者の思う本書の特徴は①社会科教育学と専門諸科学の研究者の協働の必要性、②大事だけれども教室では避けられやすい学習内容の扱い方、について考える機会を与えてくれる点だと考える。本書では

文化人類学・竹沢氏と社会科教育学に携わる研究者・教師が共通の問題意識をもち、実証・実践提案などがなされた。ただ社会系教科の学習で扱われる創られた概念は、「人種」「民族」だけに止まらない。このような意味でも今後、類似の研究を試みたい研究者・教師にとって大いに参考になる本であろう。また近年は「人種」「民族」をはじめ共生に関わる問題がニュース等でも数多く報じられ、教室のなかで学ぶ必要性が指摘される。一方で教室内に当事者がいるなど、教師にとっては扱いに苦慮する内容でもある。本書全体にわたって、このような学習内容の扱い方について示唆に富む記述や解説が多かったと思われる。

本書の課題についても若干であるが触れたい。本書は小学校から高校に至る授業実践が示され、読者に対してどのように取り組めばよいのかわかりやすく提示される。一方、このような実践は投げ込み的ではなく、繰り返し、継続して実践されることが望ましい。そうなる小学校から高校に至る学習において「人種」「民族」をどのように位置付け、継続して実践するべきかというカリキュラム的な示唆があってもよかつたのではないだろうか。加えて「文化人類学の成果を教育に反映させるべき」との主張が本書で散見された。著者らの目的を達成するためにも最も重要なことである。一方で学問成果の教育・実践への反映の遅さは、以前から指摘される。反映が難しい理由（例えば、教科書改訂のスパン）については若干触れていたが、では私たちはどうすべなのだろうか。著者なりの提案や方策を聞いたかった。

もちろん上述の指摘は、本書の価値をいささかも損なうものではないし、むしろ読者である私たちも共に考えていくべきものである。すでに本書は著者らと同じ問題意識を有する他分野の研究者にも影響を与え、論考の中で本書が引用され始めている（例えば、伊藤、2021）。国際理解教育や「人種」「民族」の学習指導に悩む教師だけでなく、広くその指導や学習に携わる人々にもぜひ読んでほしい。

文献

伊藤千尋（2021）高校地理教科書における「人種」に関する記述の問題点—差別・偏見を生まない地理教育に向けて、*E-journal GEO* 16 (2), 327-344.